

A dark, textured map of East Asia, including China, Korea, and Japan, serves as the background. The map is rendered in shades of brown, green, and blue, with a slightly grainy, historical feel.

中国の文化Ⅲ

日中文化交流史

第八回 秀吉の朝鮮出兵

十一月十五日、横田めぐみさんの
母親の早紀江さん（八五）が、めぐみ
さんの思い出の品を公開した。その
一つが高さ五センチほどの「萩焼」
の一輪挿し。めぐみさんが小学六年
生の修学旅行で山口県萩市を訪れた
際、お母さんへのお土産としてプレ
ゼントしてくれたものという。

「横田めぐみさん拉致四十四年

思い出の品公開の母『喜びの日は来る』」

（NHK首都圏ネットワーク

二〇二一年十一月十五日）





拉致された朝鮮陶工が作った萩焼

「懐かしいふるさとに帰りたい」

京都の古美術品収集家が所蔵していたハングルで望郷の詩が書き込まれた江戸期の萩焼茶碗が、二〇〇八年、その遺族から韓国の国立中央博物館に寄贈された。

萩焼は秀吉の朝鮮出兵の際、毛利輝元が朝鮮から拉致してきた陶工に作らせたのが始まり。この茶碗もそうした陶工の一人が作ったものと考えられている。



ハングル墨書茶碗(韓国国立中央博物館蔵)

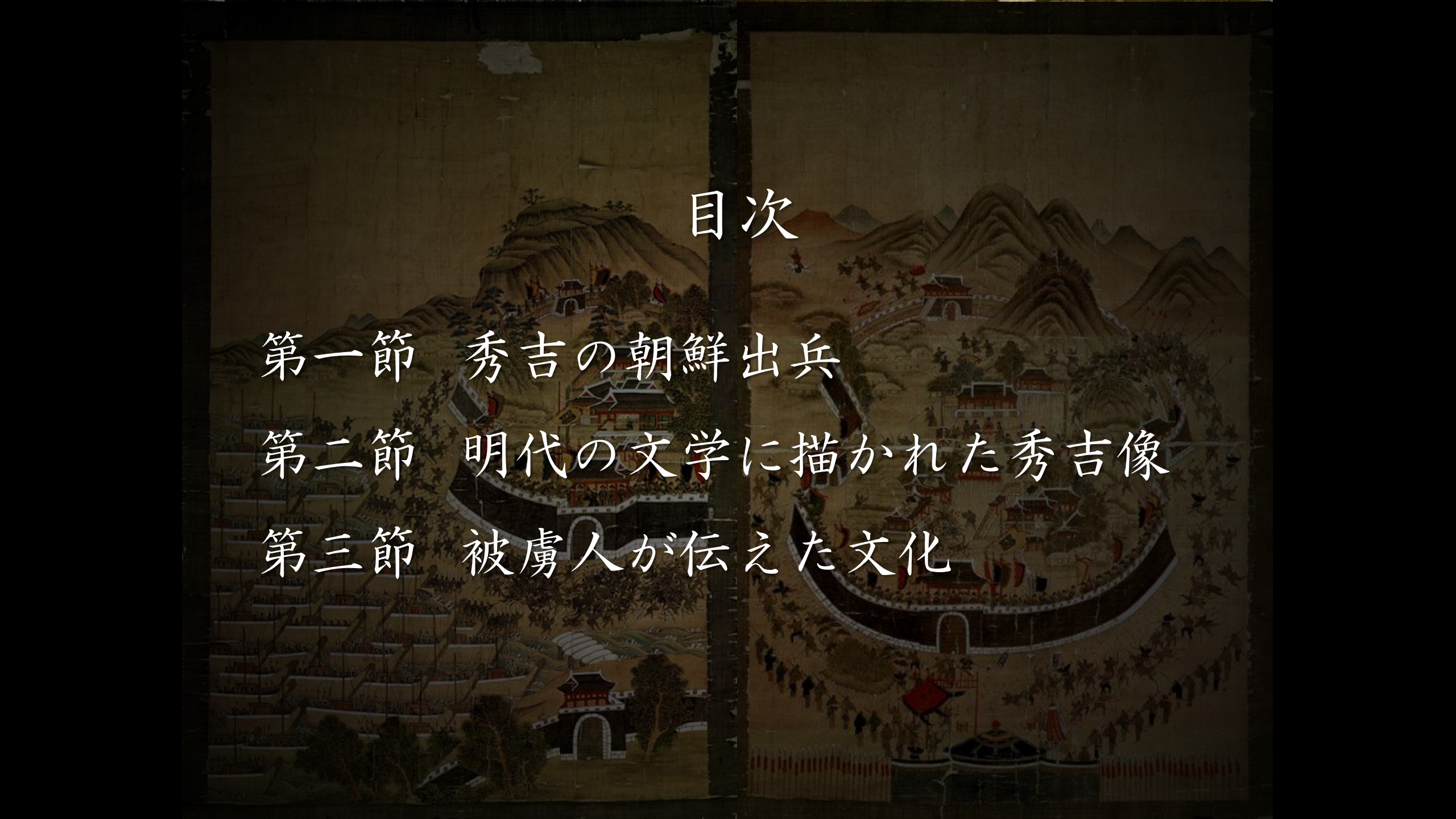
一五九二年、日本は白村江の戦い（六六三年）以来、九百年ぶりとなる大規模な海外派兵を開始した。豊臣秀吉の朝鮮出兵である。

中国沿海部や朝鮮半島を襲った倭寇に続き、朝鮮全土に戦禍をもたらし、秀吉の朝鮮出兵は、対戦相手となった中国や朝鮮の人々に日本に対する負の記憶を刻み込んだ。

その一方で、戦いの中、朝鮮半島から拉致された人々（被虜人）は、日本へ新たな知識や技術を伝えた。

朝鮮の儒者が伝えた朱子学は、江戸幕府によって武士の正学と定められ、平和で秩序ある社会を再構築する礎となった。

朝鮮の陶工たちが伝えた磁器の技術は、日本に有田焼・萩焼・薩摩焼など新たな産業を生み出す契機となった。



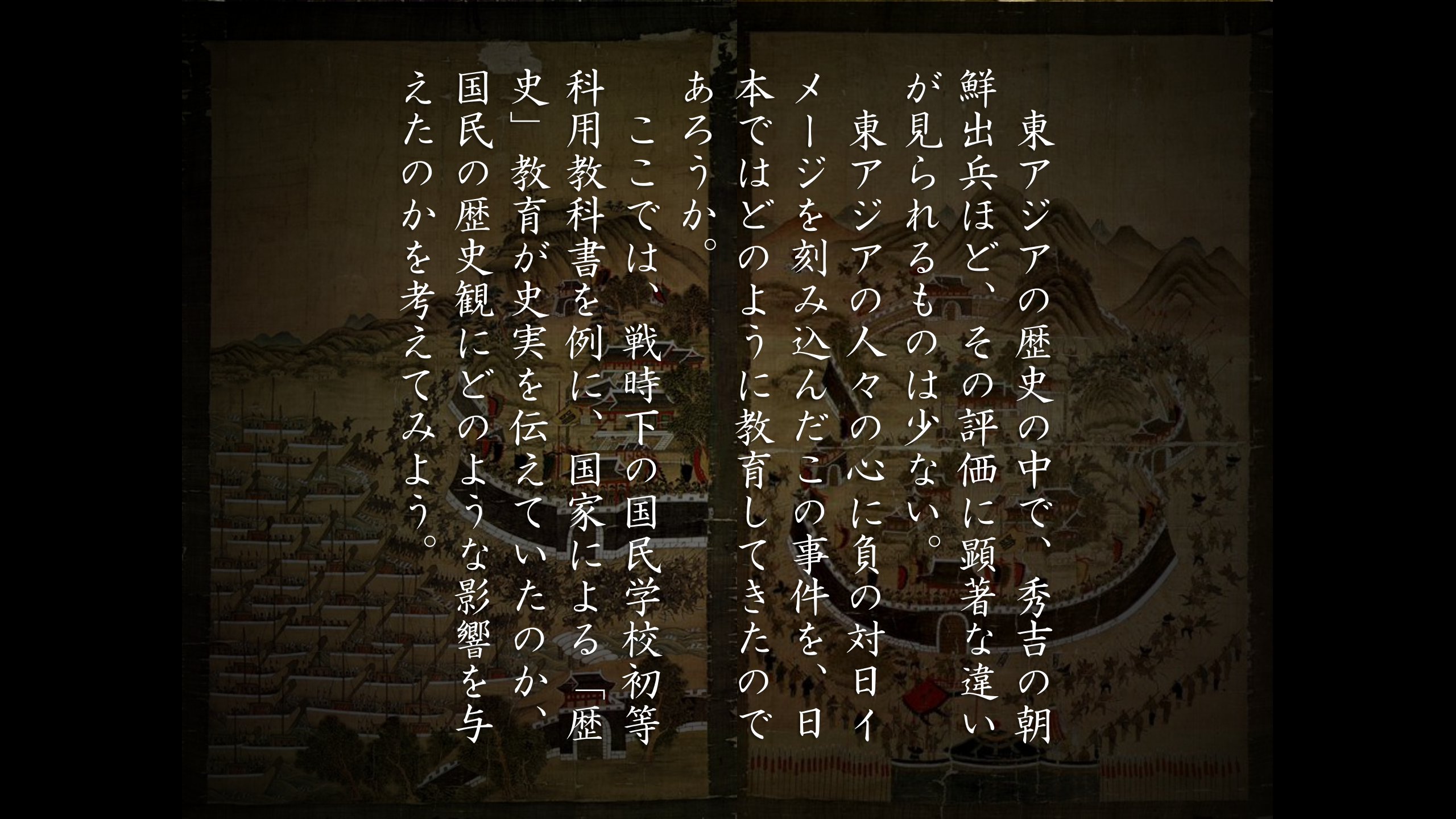
目次

第一節 秀吉の朝鮮出兵

第二節 明代の文学に描かれた秀吉像

第三節 被虜人が伝えた文化

第一節 秀吉の朝鮮出兵



東アジアの歴史の中で、秀吉の朝鮮出兵ほど、その評価に顕著な違いが見られるものは少ない。

東アジアの人々の心に負の対日イメージを刻み込んだこの事件を、日本ではどのように教育してきたのであろうか。

ここでは、戦時下の国民学校初等科用教科書を例に、国家による「歴史」教育が史実を伝えていたのか、国民の歴史観にどのような影響を与えたのかを考えてみよう。

初等科國史

上

文部省

て、元氣が國に満ちあふれました。かうして、信長が御代のしづめになるやうにとまいた種は、秀吉によつて、みごとな花と咲いたのであります。

三 扇面の地圖
初等科國史（文部省、一九四三年発行）

〔解説〕

日本政府は日中戦争が長期化する中、一九四一年、「皇国の道に則つて初等普通教育を施し、国民の基礎的鍊成を行う」ことを目的に、国民学校令を公布し、従来の小学校を国民学校に改組した。

本書は戦時中、この国民学校で使われていた国定歴史教科書である。

初等科國史

上

文部省

て、元氣が國に満ちあふれました。かうして、信長が御代のしづめになるやうにとまいた種は、秀吉によつて、みごとな花と咲いたのであります。

初等科国史（文部省、一九四三年発行）

〔解説〕

戦国時代に終止符を打った豊臣秀吉は、西欧の進出に対抗するため、大陸侵攻（「唐入り」）を計画する。

しかし朝鮮に半島の通過を拒否される、攻撃の矛先を朝鮮に代え、二度の出兵（文禄・慶長の役、韓国では壬辰・丁酉倭乱と呼ぶ）を行った。戦時中の国民学校では、これをどのように教育していたのだろうか。

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

秀吉は、海内平定の軍を進めながら、早くも、その次のことを考へてゐました。それは、朝鮮・支那はもちろん、フィリピンやインドまでも従へて、日本を中心とする大東亜を建設しようといふ、大きな望みでありました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

て、元氣が國に満ちあふれました。かうして、信長が御代のしづめになるやうにとまいた種は、秀吉によつて、みごとな花と咲いたのであります。

三 扇面（せんめん）の地圖

秀吉は、海内平定の軍を進めながら、早くも、その次のことを考へてゐました。それは、朝鮮・支那はもちろん、フィリピンやインドまでも従へて、日本を中心とする大東亜を建設しようといふ、大きな望

みでありました。九州から歸る途中、對馬の宗氏に命じて、朝鮮に朝賀の使節をよこすやう交渉させたのも、そのためであります。國內がしづまると、秀吉はいよいよ朝鮮を仲立ちとして、明との交渉を始めようとしてゐました。また天正十九年には、フィリピンやインドに書を送つて、入貢をすすめました。ところが朝鮮は、明の威勢をはばかりつて、わが申し入れに應じません。そこで秀吉は、關白を退いて大閤となり、まづ朝鮮に出兵し、進んで明を討たうと考へました。沿海の諸國に軍船を造らせ、水夫を集め、肥前（ひぜん）の名護屋（なごや）に本陣を構へるなど、用意もすつかり整ひました。

文祿元年、宇喜多秀家が總大將となり、小西行長、加藤清正らが先手となつて、總勢十五萬餘の大軍が、名護屋を出發しました。幾千とも數知れぬ軍船に、それぞれ家紋のついた幕を張りめぐらし、思

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

国内がしづまると、秀吉は、いよいよ朝鮮を仲だちとして、明との交渉を始めようと思いました。……ところが朝鮮は、明の威勢をはばかって、わが申し入れに応じません。そこで秀吉は、関白を退いて太閤となり、まづ朝鮮に出兵し、進んで明を討たうと考えました。

て、元氣が國に満ちあふれました。かうして、信長が御代のしづめになるやうに、いまは秀吉によつて、みな花と咲いたのであります。

三 扇面の地圖

秀吉は、海内平定の軍を進めながら、早くも、その次のことを考へてゐました。それは、朝鮮支那はもちろん、フィリピンやインドまでも従へて、日本を中心とする大東亞を建設しようといふ、大きな望

みでありました。九州から歸る途中、對馬の宗氏に命じて、朝鮮に朝賀の使節をよこすやう交渉させたのも、そのためであります。國內がしづまると、秀吉は、いよいよ朝鮮を仲だちとして、明との交渉を始めようと思いました。また天正十九年には、フィリピンやインドに書を送つて、入貢をすすめました。ところが朝鮮は、明の威勢をはばかつて、わが申し入れに應じません。そこで秀吉は、関白を退いて太閤となり、まづ朝鮮に出兵し、進んで明を討たうと考へました。沿海の諸國に軍船を造らせ、水夫を集め、肥前の名護屋に本陣を構へるなど、用意もすつかり整ひました。

文祿元年、宇喜多秀家が總大將となり、小西行長、加藤清正らが先手となつて、總勢十五萬餘の大軍が、名護屋を出發しました。幾千とも數知れぬ軍船に、それぞれ家紋のついた幕を張りめぐらし、思





秀吉は日本統一を祝賀する朝鮮通信使に対し、「証明嚮導」（明征服の先導をすること）を要求した。この要求は「仮途入明」（明に入るため朝鮮の道を借りたい）という婉曲な表現に変えて伝えられたが、朝鮮がこれを拒否すると、一五九二年（文禄元年）、朝鮮への出兵を行った。

文禄の役（壬辰倭乱）



豊臣秀吉(1536～98)

ひ思ひの旗を勇ましく潮風にな
びかせ、海をおほつて進みました。
釜山に上陸したわが軍は、連戦連
勝、北進また北進して、たちまち京
城をおとし、いれ、明の援軍を破り、
わづか四箇月たらずで、ほとんど
朝鮮全土を従へてしまひました。
この間、清正はたびたびの戦に、槍
のほまれ高く、拔群のてがらをあ
らはし、また、全軍よく軍紀を守つ
て、人民をあはれみ、日本武士の面
目を示しました。ただ、水軍の力



軍船の出發

が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備
には、たいそう苦心しました。

明は、大いに驚き、小西行長について講和の交渉を始める一方、卑
怯にも、大軍をさし向けて、行長を平壤に破り、一氣に京城へせまら
うとしました。これを碧蹄館に迎へ撃つたのが、小早川隆景、立花



宗茂らでありました。
日ごろの手なみを見せ
るのは今と、出陣のこと

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

釜山に上陸したわが軍は、連戦連
勝、北進また北進して、たちまち京
城をおとし、いれ、明の援軍を破り、
わづか四箇月たらずで、ほとんど朝
鮮全土を従へてしまひました。……
また、全軍よく軍紀を守って人民を
あはれみ、武士の面目を示しました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

ひ思ひの旗を勇ましく潮風にな
びかせ、海をおほつて進みました。
釜山に上陸したわが軍は、連戦連
勝、北進また北進して、たちまち京
城をおとし、いれ、明の援軍を破り、
わづか四箇月たらずで、ほとんど
朝鮮全土を従へてしまひました。
この間、清正はたびたびの戦に、槍
のほまれ高く、拔群のてがらをあ
らはし、また、全軍よく軍紀を守つ
て、人民をあはれみ、日本武士の面
目を示しました。ただ、水軍の力



軍船の出發

が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備
には、たいそう苦心しました。

明は、大いに驚き、小西行長について講和の交渉を始める一方、卑
怯にも、大軍をさし向けて、平壤に破り、一氣に京城へせまら
うとしました。これを、踏跡館に、破たのが、小早川隆景、立花



宗茂らでありました。
日ごろの手なみを見せ
るのは、今と、出陣のこと

戦時中の教科書は、この戦いの中
で日本軍は「全軍よく軍紀を守って、
人民をあはれみ、武士の面目を示
し」たと説明しているが、それは事
実だったのだろうか。





NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年 第8集」より



釜山鎮殉節圖



日本武將が見た朝鮮出兵

〔解説〕

言葉の通じない朝鮮半島へ派遣された日本の戦国武將たちは、老若男女を問わず無差別に殺害した。

秀吉の第一次朝鮮出兵（壬辰倭乱Ⅱ文禄の役）で小西行长率いる一番隊に属した松浦鎮信の部将・吉野甚五左衛門は、その惨状を従軍記*の中にこう記している。

*「吉野甚五左衛門覚書」

（塙保己一編『続群書類従』巻五九一所収）



續群書類従

目錄

日本武將が見た朝鮮出兵

皆手を合はせてひざまづき、聞きもならわぬ唐言、『まのら、まのら』といふことは、助けよところを聞こえけれ。

それをも味方聞きつけず、きりすてうち捨て踏みころし、是を戦神の血祭と、女男も犬猫も、皆きり捨てて、きりくびは三万程とぞ見へにける。

吉野甚五左衛門覚書

(塙保己一編『続群書類従』巻五九一所収)



續群書類従

目錄

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

ただ、水軍の力が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備には、たいそう苦心しました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

城をおとし、いれ、明の援軍を破り、わづか四箇月たらずで、ほとんど朝鮮全土を従へてしまひました。この間、清正はたびたびの戦に、槍のほまれ高く、拔群はつぐんのてがらをあらはし、また、全軍よく軍紀ぐんぎを守つて、人民をあはれみ、日本武士の面目を示しました。ただ、水軍の力



が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備には、たいそう苦心しました。

明は、大いに驚き、小西行長について講和の交渉を始める一方、卑怯にも、大軍をさし向けて、行長を平壤に破り、一氣に京城へせまらうとしました。これを碧蹄館に迎へ撃つたのが、小早川隆景・立花

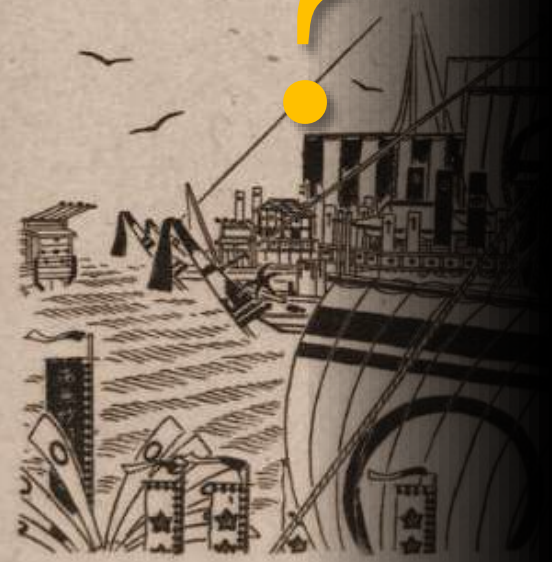
宗茂むねしげらでありました。

日ごろの手なみを見せるのは今と、出陣のことはもををしく、六七倍の明軍をさんざんに撃ち破つて、勇名をとどろかしたのであります。



日本軍は「占領地の守備にたいそう苦心」したというが、その本当の理由は何だったのだろうか？

城をおとし、明の援軍を破り、わづか四箇月たらずで、ほとんどの朝鮮全土を従へてしまひました。この間、清正はたびたびの戦に、槍のほまれ高く、拔群のてが、あらはし、また、全軍よく軍紀を守つて、人民をあはれみ、日本武士の面目を示しました。ただ、水軍の力



が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備には、たいそう苦心しました。

明は、大いに驚き、小西行長について講和の交渉を始める一方、卑怯にも、大軍をさし向けて、行長を平壤に破り、一気に京城へせまらうとしました。これを碧蹄館に迎へ撃つたのが、小早川隆景、立花



宗茂らでありました。日ごろの手なみを見せるのは、今と、出陣のことは、もををしく、六七倍の明軍をさんざんに撃ち破つて、勇名をとどろかしたのであります。





万曆帝(1563~1620)



豊臣秀吉(1536~98)

武力戦ではかなはないと見たか、明は、ふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。ところが、明の使節が持つて来た國書の中には、特に爾を封じて日本國王と爲すといふ、無禮きはまる文句がありました。秀吉は大いに怒つて、その使ひを追ひかへし、再征の命令をくだしました。

慶長二年、ふたたび行長清正らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部の各地を従へました。そのうち、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によつて、出征の諸將は、それぞれ兵をまとめて歸還しました。この時、島津義弘は、酒川の戦で、数十倍の明軍を撃ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後をかざりました。



秀吉の扇

かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機會に、國民の海外發展心は、一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を與へました。一方、明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すっかり衰へてしまひました。これが、やがて滿洲から清が興るものになるのです。

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

武力戦ではかなはないと見たか、明はふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

武力戦ではかなはないと見たか、明は、ふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。ところが、明の使節が持つて来た國書の中には、特に爾を封じて日本國王と爲すといふ、無禮きはまる文句がありました。秀吉は大いに怒つて、その使ひを追ひかへし、再征の命令をくだしました。

慶長二年、ふたたび行長清正らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部の各地を従へました。そのうち、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によつて、出征の諸將は、それぞれ兵をまとめて歸還しました。この時、島津義弘は、酒川の戦で、数十倍の明軍を撃ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後をかざりました。



秀吉の扇

かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機會に、國民の海外發展心は、一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を與へました。一方、明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すっかり衰へてしまひました。これが、やがて滿洲から清が興るものになるのです。

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

ところが、明の使節の持つて来た國書の中には、爾（なんぢ）を封じて日本國王と爲すといふ、無禮きはまる文句がありました。

秀吉は大いに怒つて、その使ひを追いかへし、再征の命令をくだしました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

秀吉と明との間では、どのような
交渉が行われていたのだろうか？



万曆帝(1563～1620)

豊臣秀吉(1536～98)



NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年 第8集」より

大明与日本和平条件

秀吉が明に出した講和条件は、次のようなものであった。

第一条 明の皇帝の皇女を日本の天皇の后にすること

第二条 断絶した勘合貿易を復活し、官船と商船の往来を認めること

第四条 日本は朝鮮の領土のうち北四道と漢城だけを朝鮮国王に還す



万曆帝(1563～1620)



豊臣秀吉(1536～98)

慶長の役（丁酉倭乱）

これに対し明は、一五九六年（慶長元年）九月、秀吉に封王の金印と冠服を与えたが、万曆帝の誥勅には「茲に特に爾を封じて日本国王と為す」とあるのみで、講和条件への回答がなかった。このため秀吉は、翌一五九七年（慶長二年）、再び朝鮮への出兵を行った。



万曆帝(1563～1620)



豊臣秀吉(1536～98)



戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

そのうち、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によって、出征の諸将は、それぞれ兵をまとめて帰還しました。かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機会に国民の海外発展心は一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を与えました。

慶長二年、ふたたび行長・清正らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部の『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によつて、出征の諸将は、それぞれ兵をまとめて帰還しました。この時、島津義弘は、泗川の戦で、数十倍の明軍を撃ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後をかざりました。



秀吉の扇

かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機会に、国民の海外発展心は、一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を與へました。一方、明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すっかり衰へてしまひました。これが、やがて満洲から清が興るものになるのです。

朝鮮の役に際して、秀吉の用ひた扇面が、今に傳はつてゐます。一面には、日本と明との日常のことは、いくつか書き並べてあり、他の一面は、日本・朝鮮・支那の三國を

二度にわたる朝鮮出兵は、一五九八年、秀吉の死によって終結する。教科書はこの戦いの中で日本軍が示した「りっぱなふるまひ」は「朝鮮の人々に深い感銘を与へ」たというが、それは事実だったのか？

がありましたが、秀吉は大いに怒って、その使ひを追ひかへし、再征の命令をくだしました。

慶長二年、ふたたび行長、が先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部の各地を従へました。

三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によつて、出征の諸將は、それぞれ兵をまとめて歸還しました。この時、島津義弘は、酒川の戦で、数十倍の明軍を撃ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後をかざりました。



秀吉の扇

かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機会に、國民の海外發展心は、一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を與へました。一方、明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すっかり衰へてしまひました。これが、やがて満洲から清が興るものになるのです。

朝鮮の役に際して、秀吉の用ひた扇面が、今に傳はつてゐます。一面には、日本と明との日常のことは、が、いくつか書き並べてあり、他の一面は、日本、朝鮮、支那の三國を





NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年 第8集」より

第二節 明代の文学に描かれた秀吉像



姜沆「看羊録」(『睡隠集』所収)

姜沆(一五六七―一六一八)、号は睡隠。一五九三年、科挙に合格し、朝鮮王朝の官僚となる。

一五九七年、秀吉の第二次朝鮮出兵(丁酉倭乱Ⅱ慶長の役)の際に捕虜となり、日本で三年近い抑留生活を送った後、一六〇〇年に帰国。

「看羊録」は、その間の見聞を綴ったものである。



被虜人（拉致被害者）が見た耳塚

〔解説〕

一五九八年、秀吉の死により、朝鮮出兵は終わった。翌一五九九年、日本に拉致された朝鮮の人々が、京都の耳塚で犠牲者を弔う法事を行うことになった。

当時、日本に抑留されていた姜沆は、その求めに応じて耳塚供養の追悼文を起草した。

*写真は姜沆の詩文集『睡隠集』

睡隠集 元

睡隠集 亨

睡隠集 利

睡隠集

被虜人（拉致被害者）が見た耳塚

秀吉がわが国を再び侵略した時、諸將に対して「人はそれぞれ二つの耳があるが鼻は一つである」と言つて、すべての兵士にわが国の人の鼻をそいで首級に代え、倭京（＝京都）に送るよう命じた。

それが積もって一つの丘のようになったので、大仏寺（方広寺）の前に埋めた。

姜沆「看羊録」（『睡隱集』所収）

白華輕黃重
幅書琪花瑞草瑤花瑤草不知名九十春光律外榮
明月樓前如可寄美人應識遠人情
澤首座續和題一幅曰數莖叢菊色交奇遠客新題亦自宜
節義高秋霜露底對花猶道是吾師秀吉之再寇我國也令諸將曰人各有兩耳鼻則一也令一卒各割我國人鼻以代首級輸致倭京積成一丘陵埋之大佛寺前
幾與愛陽山腰平血肉之慘舉此可知我國人聚米

以祭要余作文有鼻耳西峙修蛇東藏帝艸藏鹽鮑魚不香之語庚子二月賊將佐渡招守倭使寬吾家防守守倭教令即出去乃往見舜首座求利涉之路
杜鰲中四月初二日發倭京既乘船賦一絕曰聖恩遙及害中囚絕域歸帆近麥秋蓬島渺茫滄海濶却將忠義滿孤舟行至壹岐島以風雨留一旬登山祭天以祈風翌曉月星明擬風伯指路時五月五日也



方広寺

This aerial photograph shows a residential neighborhood with a grid-like street pattern. A major road runs vertically through the center, intersecting with a horizontal road. To the left of the intersection is a large, rectangular residential block with many small houses. To the right is a larger area with more trees and some larger buildings. A green label '方広寺' is placed in the upper right quadrant.

豊国神社

This label is located in the lower right quadrant of the image, pointing to a small, red-roofed building surrounded by trees. The label is green with white text.

旧方広寺
(大仏寺)
跡地

This label is located in the bottom right corner of the image, pointing to a large, open, grassy area. The label is red with white text.

耳塚

This label is located in the bottom left quadrant of the image, pointing to a small, circular, grassy area. The label is green with white text.



耳塚（鼻塚）

被虜人（拉致被害者）が見た耳塚

わが国人が米を集めて（耳塚を）祭ることになり、私に弔文を作るよう求めたので、こんな語を入れた。

鼻耳は西に峙（そばだ）ち

脩蛇*は東に蔵（かく）る

帝羆は塩に蔵（かく）れ

鮑魚は香らず

姜沆「看羊録」（『睡隱集』所収）

*「脩蛇」は大蛇。朴鐘鳴氏は「句全体の意味不詳」とする（東洋文庫訳注）

一幅日數莖叢菊色交奇遠客新題亦自宜節義高
秋霜露底對花猶道是吾師秀吉之再寇我國也令
諸將曰人各有兩耳鼻則一也令一卒各割我國人
鼻以代首級輸致倭京積成一丘陵埋之大佛寺前
幾與愛陽山腰平血肉之慘舉此可知我國人聚米

以祭要余作文有鼻耳西峙脩蛇東藏帝羆藏鹽鮑
魚不香之語庚子二月賊將佐渡招守倭使寬吾家
防守守倭教令即出去乃往見舜首座求利涉之路
杜 四月初二日發倭京既乘船賦一絕曰聖恩遙
及害中囚絕域歸帆近麥秋蓬島渺茫滄海濶却將
忠義滿孤舟行至壹岐島以風雨留一旬登山祭天
以祈風翌曉月星明擬風伯指路時五月五日也

被虜人（拉致被害者）が見た耳塚

鼻耳は西に峙（そばだ）ち
脩蛇*は東に蔵（かく）る
帝羗*は塩に蔵（かく）れ
鮑魚*は香らず

姜沆「看羊録」（『睡隱集』所収）

*「脩蛇」は東の阿弥陀ヶ峰に埋葬され
た秀吉を指す。

*「羗」は干し肉。遼の太宗は没後、契
丹族の習俗に従ってミイラにされた。漢
民族はこれを「帝羗」（ミイラ皇帝）と呼
んで揶揄した。

*「鮑魚」は悪しく臭いものを指す。
姜沆はこれらの言葉で秀吉を揶揄し
ているのである。

鼻以代首級輸致倭京積成一丘陵埋之大佛寺前
幾與愛陽山腰平血肉之慘舉此可知我國人聚米

以祭要余作文有鼻耳西峙脩蛇東藏帝羗藏鹽鮑
魚不香之語庚子二月賊將佐渡招守倭使寬吾家
防守守倭教令即出去乃往見舜首座求利涉之路
杜源四月初二日發倭京既乘船賦一絕曰聖恩遙
及塞中囚絕域歸帆近麥秋蓬島渺茫滄海濶却將
忠義滿孤舟行至壹岐島以風雨留一旬登山祭天
以祈風翌曉月星明擬風伯指路時五月五日也



耳塚

秀吉が埋葬された
豊国廟跡

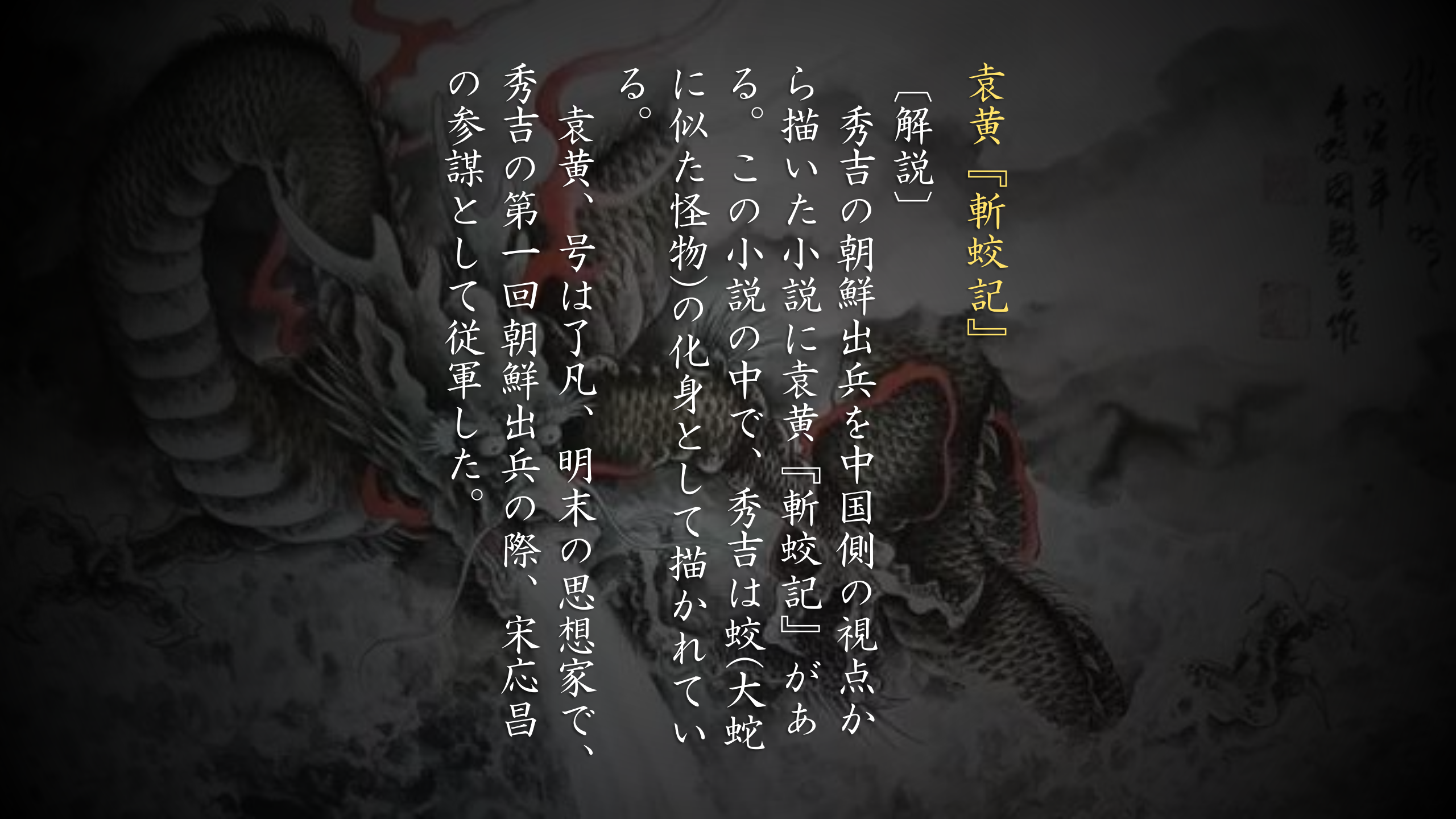
姜沆はなぜ秀吉を「脩蛇」(大蛇)と呼んだのか？

①秀吉が残虐非道だったから

②秀吉は大蛇の化け物と考えられていたから



耳塚 (鼻塚)



袁黄『斬蛟記』

〔解説〕

秀吉の朝鮮出兵を中国側の視点から描いた小説に袁黄『斬蛟記』がある。この小説の中で、秀吉は蛟（大蛇に似た怪物）の化身として描かれている。

袁黄、号は了凡、明末の思想家で、秀吉の第一回朝鮮出兵の際、宋応昌の参謀として従軍した。

袁黄『斬蛟記』梗概

青木正児「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

関白平秀吉は日本人でも無く、中国
人でも無い、蓋し妖怪変化の者で
ある。

昔、旌陽許真君が蛟を斬った時、
一匹の小蛟が有って其の腹から出た。
小蛟は未だ別に犯せる罪が有るわけ
でも無かったからして、誅を加へず
其まま江中に縦って大海に帰せしめ
た。すると其の小蛟は日本の紅鹿江
なる銀蛟山に往って住んだ。

それから一千二百余年間、物類を
害すること記し尽くせぬほどであつ
たが、今や又化して人となった。其
れが即ち平秀吉である。

*旌陽許真君、許遜(二三九〜三七四)、東晋の道士。

袁黄(了凡)*『斬蛟記』梗概

青木正児 「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

秀吉は一兵卒より身を起し旧関白を殺して其位を奪ひ、智力を以て十六洲を征服し、各洲の民は其の妖精なるに気付かず、但其の奸智に長けたるを見てひたすら之に畏服してゐた。

琉球や朝鮮も之に朝貢し敢て礼を失はなかったが、突然万曆二十年四月に至り、彼は二十余万の大軍を率ゐて朝鮮を犯し、対馬から釜山鎮に上陸した。鮮人は風を望んで逃遁した。

秀吉は王京に拠り、(小西)行長は平壤に拠り、(加藤)清正は安辺に拠り、沿道には皆兵を屯せしめて互に連絡を保ち、其意は実に遼東を犯し北京まで攻寄せんと欲するらしいのであった。

袁黄(了凡)*『斬蛟記』梗概(一)

青木正児「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

祖師は矢庭に剣を揮うて一撃する
よと見れば、其頭はころりと墜ち、
其身は水面に浮んで来た。

長さ約数千丈、蛇形にして魚鱗あ
り。あたりは霧の如く白き一種異様
の気が充塞して、咫尺(しせき)を
辨ぜず。やや暫くして気は霧れ、祖
師は徐茂公に命じて其首を取って之
を埋めしめた。

是れ実に万曆二十一年正月七日の
事であつた。

『斬蛟記』はいつ書かれたのか？

『斬蛟記』は、豊臣秀吉の死を「万暦二十一年（一五九三年）正月七日」としている。……秀吉が急死したのは、万暦二十六年（一五九八年）八月十八日であり、……同年十一月には福建巡撫・金学曾が「関酋平秀吉、死す。内乱まさに起こらんとす」と報告しているから……この小説が書かれたのは、それ以前であることが証明できよう。

王勇『中日関係史考』

（中央編訳出版社、一九九五年）



王勇

	作者	作品名	内容
明代	袁黄	斬蛟記	豊臣秀吉に化けた蛟(大蛇)を退治する話
	佚名	戚南塘剿平倭寇志伝	
	蕭応宮	朝鮮征倭紀略	
	錢塘西湖隱叟	胡少保平倭記	
	佚名	(戯曲) 蓮囊記	
清代	陳忱	水滸後伝	水滸伝の英雄・李俊がシャム王となり、倭の関白と戦う話
	青心才人	金雲翹伝	
		野叟曝言	倭寇の頭目・関白木秀とその妻を退治する話
	佚名	綺楼重夢	
	李石川	緑野仙踪	
	陳朗	雪月梅伝	
	夢花居士	蜃楼外史	
	佚名	十二蟾	
	佚名	四香縁	

秀吉の朝鮮出兵は、いまも東アジアの人々の間で苦難の歴史として記憶されている。

二〇一四年、韓国でこの戦いで活躍した将軍を描いた映画が大ヒットになった。その将軍とは？

① 李舜臣 이순신

② 安重根 안중근



韓国映画『명량(鳴梁)』*

二〇一四年公開の『명량(鳴梁)』は、秀吉の朝鮮出兵の際、鳴梁での海戦で朝鮮水軍を勝利に導いた李舜臣(이순신)将軍の活躍を描いた映画。韓国では観客動員数が史上最高の一七〇〇万人*を突破する大ヒットとなった。

*邦題「バトル・オーシャン 海上決戦」

*韓国の総人口約五千万の三四%に当たる



第三節 被虜人が伝えた文化



睡隱姜沆先生像

姜沆 (1567-1618)



藤原惺窩 (1561-1619)



林羅山 (1583-1657)

姜沆と藤原惺窩

〔解説〕

姜沆（一五六七―一六一八）は、京都に幽閉されている間に、幾人かの日本の僧侶と親交を持つ。その中に舜首座という漢文に通じた禅僧がいた。後年、日本近世儒学の祖と呼ばれることになる藤原惺窩（一五六―一六一九）である。姜沆は儒教を通じて平和が訪れることを期待し、彼らに儒教を伝えた。



内山書院（全羅南道靈光郡仏甲面）の姜沆像

姜沆と藤原惺窩

「私は、倭の都に連れてこられてからというもの、倭国の内情を知ろうと思い、時々倭僧と接した。その中に妙寿院の舜首座（藤原惺窩）という者がいた。（中略）」

彼は大変聡明で、古文を理解し、書について通じていないものはな

かった。」

姜沆『看羊録』賊中聞見録



内山書院（全羅南道靈光郡仏甲面）の姜沆像



小月四郎殿
文政元年五月
浅草寺
藤原

Q

藤原惺窩はもともとどのような身分の出身であつたか？

①公家

②武士



近世儒学の祖・藤原惺窩

(一五六一～一六一九)

〔解説〕

公家の家に生まれた藤原惺窩は、武士による力の支配を嫌い、中国や朝鮮に平和で秩序ある社会をもたらし、儒教に深い関心を抱いていた。

姜沆との交流を通じて朝鮮の国教である朱子学に傾倒した惺窩は、やがて仏教を離れ、朱子学の研究と教育に専念し、近世儒学の祖となった。



平和で秩序ある世界に憧れた惺窩

（藤原惺窩）はかつてこう言った。

「実に残念です。私は大唐に生まれることもできず、朝鮮に生を得ることもできず、日本のこのような時代に生まれるとは。」

私は辛卯（一五九一年）三月、薩摩に下り、朝鮮に渡ろうと考えましたが、朝鮮出兵のために海を渡る望みは叶いませんでした。」

姜沆『看羊録』賊中聞見録



Q

藤原惺窩に師事した人物に林羅山がいる。林羅山は後年、儒教の官学化に貢献したが、羅山はどのような身分の出身であつたか？

①町人

②武士



藤原惺窩と林羅山（一五八三―一六五七）

〔解説〕

林羅山は京都の町人の出であつたが、師である藤原惺窩の推挙により徳川幕府の顧問となり、武家諸法度の撰定や朝鮮通信使の接待など、政治や外交にその手腕を発揮した。

羅山は、さらに上野忍岡（しのぶがおか）に私塾や書庫、孔子廟を設け、儒教の官学化に貢献した。



姜沆 (1567-1618)



藤原惺窩 (1561-1619)



林羅山 (1583-1567)

新たな文化を伝えた被虜人たち

〔解説〕

被虜人たちの中には、日本に新たな文化を伝えた人々もいた。

鍋島藩初代藩主鍋島直茂によって佐賀の地に連れてこられた李参平は、有田で良質の磁器鉢を発見し、それまで中国などからの輸入に頼っていた磁器の国産化を可能にした。



有田焼の祖・李参平 (?-1655)



NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年第8集」より

秀吉の朝鮮出兵の再評価

〔解説〕

秀吉は没後、朝廷から神号を与えられ、豊国神社が建立されたが、江戸時代になると、徳川幕府の意向により神号は剥奪され、神社も廃絶となった。

ところが明治時代になると、秀吉は「皇威を海外に宣べ、数百年の後、猶も彼をして寒心せしむ。その国家に大勲功ある、今古に超越する」と再評価され、神社が再建された。

方広寺

豊国神社

耳塚





「耳塚はいま」 （鈴木ゼミ 2014年度生制作）

史跡方広寺石臺および石塔（昭和44年4月12日指定）



文化庁

「耳塚（鼻塚）」

この塚は、16世紀末、天下を統一した豊臣秀吉がさらに大陸にも支配の手をのばそうとして、朝鮮半島に侵攻したいわゆる文禄・慶長の役（朝鮮史では、壬辰・丁酉の倭乱、1592～1598年）にかかる遺跡である。

秀吉輩下の武将は、古来一般の戦功のしるしである首級のかわりに、朝鮮軍民男女の鼻や耳をそぎ、塩漬にして日本へ持ち帰った。それらは秀吉の命によりこの地に埋められ、供養の儀がもたれたという。これが伝えられる「耳塚（鼻塚）」のはじまりである。

「耳塚（鼻塚）」は、史跡「御土居」などとともに京都に現存する豊臣秀吉の遺構の一つであり、塚の上に建つ五輪の石塔は、その形状がすでに寛永2年（1643）の古絵図にみとめられ、塚の築成から程ないころの創建と想われる。

秀吉が惹き起こしたこの戦争は、朝鮮半島における人々の根強い抵抗によって敗退に終わったが、戦役が遺したこの「耳塚（鼻塚）」は、戦乱下に被った朝鮮民衆の受難を、歴史の遺訓として、いまに伝えている。

耳塚（鼻塚）の解説文

京 都 市

まとめ

一五九二年から九八年まで七年に及んだ秀吉の朝鮮出兵は、中国や朝鮮の人々の心に負の対日イメージを刻み込んだ。

一方、朝鮮の儒学者が伝えた朱子学は、日本に秩序ある太平の世をもたらし、陶工たちが伝えた製磁の技術は、日本に新たな産業を誕生させた。

明治以降、日本がアジアへの拡張政策を始めると、秀吉の朝鮮出兵は「国家への大勲功」として再評価され、歴史教育を通じて、中国や朝鮮とは対照的な肯定的イメージが形成されていた。

参考文献

- 仲尾宏『朝鮮通信使と壬辰倭乱』
(明石書店、二〇〇〇年)
- 平川新『戦国日本と大航海時代』
(中公新書、二〇一八年)
- 姜沆、朴鐘鳴訳注『看羊録―朝鮮儒者の日本抑留記』(東洋文庫四四〇、平凡社、一九八四年)
- 青木正兒「支那小説戯曲中の豊臣秀吉」(『青木正兒全集』所収)
- 孟森「袁了凡斬蛟記考」(上海商務印書館、一九一六年)
- 王勇「明清戯曲小説中の倭寇題材―明代短編伝奇《斬蛟記》評述」
(『中日関係史考』中央編訳出版社、一九九五年)
- 鈴木健一『林羅山』(ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、二〇一二年)